

第3章

調査都市の発展と調査地区Ⅱ 地方都市

第1節 ガジアンテップの発展とその歴史

1. ガジアンテップの都市発展史

ガジアンテップは「絹の道」沿いのイスラム都市としても繁栄し、オスマントルコ時代には行政府の所在地として繁栄した。8世紀まで城(カレ)の近くに、住民は分散して居住した。16世紀、オスマントルコの時代に、ガジアンテップは重要な商業と文化の中心になった⁽¹⁾。カレ(直径1キロほど、後出の第Ⅱ-4図参照, 丸い部分)の周囲の他にも集中が始まり、15～16世紀に南西部のシャフベリ(=41, コザンル=31の西, 地図番号はⅡ-4図参照), シェヘレクスト, エュポール地区(=18, コザンルの北)などの方に拡張した。

現在, ガジアンテップの中心部にある新都市部分には近代的な店が並び, 大通り(イノヌ通り)の反対側には州庁や市庁がある。ここから南東に進むと, 伝統的なバーザール地域があり, その中に以前のハーン(本来は隊商宿, 商店や製造業事業所)があって, そこでは今日では鉄製品の溶接などをしたり, この地域の特産品であるピスタチオの加工をしている。また, ハーンには今日でも農産物が持ち込まれ, 青物の取引もなされている。

ガジアンテップには87のモスクがあり, 主モスクはボヤジュ・ジャミ(ボヤジュ地区=8に存在)である。この他にカトリックやプロテスタントの四つ

の教会がある。市中心部の北には前述の城（カレ）があり、高さ 10 メートルほどの石の城壁で囲まれている。城の北側にはアレベン川も流れ、イスラム都市の景観を示す。

ガジアンテップにおいても 1950 年代に農村からの移動者が多くなり、ガレージ、小工場の地域にある墓地近くのアラブ通り（自動車道路）の側にある空き地に、ガレージの労働者や小工場の労働者などが住む。また、低所得の人々が、市の南部や反対側の丘に住み始めた。他方、豊かな社会層は西部の庭付きの認可集合住宅に住むことになった⁽²⁾。

ガジアンテップには 15 の地区が新興北部地域にあり、市の中心部である川の北側には 8 地区が存在し、旧市街を含む地域には 15 地区、市南部には 12 地区、それに西部地域には 19 地区が広がる。

2. ガジアンテップと市内各地区

20 世紀初めまでに成立した、西部、南部、東部の市域は、1950 年代まで急激には変わらないで、市内部の空き地に住宅ができていった。20 世紀の中頃までに発展した都市は、行政官が居住するカレとその周辺地域から形成された。人種的集団や宗教的な相違に基づいて居住区が存在し、宗教関係者と商人が集まる第 2 の中心が郊外に拡大した。

第一次世界大戦と連合国軍に対する祖国解放運動による人口の喪失とその後のアルメニア人の流出によって、20 世紀の初期ガジアンテップの人口は大幅に減少した。1950 年以降になって、人口の自然増と流入による社会増で新たに拡大を始めた。流入者は、町の内部、とくに町の南部や丘や境界にある高台に、1 階建ての小さな家を作って居住し始めた⁽³⁾。50 年以降の人口増加で都市となった地域は、丘の外に拡大した。同じ時期に町の中心にあった古い墓地がアラブ道路の方へ移動して空き地となった土地には、小売、自動車修理業、小事業所ができた。カレの周辺にある古い中心から、ガジアンテップは南部や南東部に拡張した。

1965年以降におけるガジアンテップの変化は、50～65年における変化とは相違し、いわば封建的变化から近代的变化に変わることになった。近代的变化の過程では道路幅が拡大され、古い建物は破壊された。伝統的都市部分の拡張につれ、土地や建物価格、さらに家賃も急騰を始めた。このため流入者は郊外の農地を細分して居住を始めた。

都市内部における商店や都市建設地域にある小事業所は、西部のコザンル地区(=31)や町の南東を走るアクチャコユル通りと南部の(イスメット)イノヌ通りの先に集まった。変化過程で農村から人々が流入した郊外地域は、ゲジェコンド地区になった。

共和国時代には居住地区は34あったが、1950年代、とくに、60年代以降、新たに多数の居住地区が形成された。こうした居住区のうち、東部ではアクヨル地区(=1、地図番号は第Ⅱ-4図参照)からできたカバクリ地区(=27)、北部ではデュルクババ(=54)の東にはカルシヤカ地区(=26)がある。このデュルクババが、ガジアンテップの調査地で郊外地区である。イェシルオバ(=53、デュルクババの南)、ハジババ(=20、デュルクババの東)、東部ではチクソルト地区(=12、川の東)からできたイェニ・ウナルダ、アイドンババ(=4)、アリババ(=3、スルタンサリムの南)、南東部のヤブズラル地区(同=50)からできたヤブズラル、スルタンサリム(=38)、セニヨルト(=43、スルタンサリムの西)、クルトルス(=33、その北)、サチャクル(=35、その南)、南西部にありガジアンテップの調査地で中心地区のデュズテッペ(=17)、南西部のチャムリカ(=11)、西部の郊外に位置するホシュギユル(=21)、デュズテッペの西にあるヌーリー・バザールバシ(=34)である⁽⁴⁾。

上層階級は一般に近代的な概観の都市中心部の近くに居住し、下層階級は郊外の方へ移動した。この二つの間に、多くの中間階級が居住した。

町の新しい発展地域を階層別にみていこう。発展にともなって東部は、上層階級が居住する地域となり、北西は住宅協同組合の建設による住宅に住む中間階級の居住地域となった。北部と南部の高台は、下層階級の住宅が集まるゲジェコンド地域である。

ゲジェコンド居住者の多くは、ガジアンテップ郊外に住む。ただし、東部で地味の豊かな農地と商工業地域は、ゲジェコンドと区別される。西部の（後には上層階級が居住する地域に変わったが）庭付き住宅がみられる地域で建物価格が上昇したため、不法占拠者はガジアンテップ北部と南部の丘に居住し始めた。初めにゲジェコンドとなった地域は、デュルックババの東の北部のカルシヤカ（=26）、デュルックババの南のイエシルオバ（=53）、カルシヤカの東のハジババ（=20）の各地区である。鉄道の南部ではチクソルト（=12、川の東）とその近くのイエニ・マハッレの地区であり、南部のヤブズラルの近くのアリババ（=3）、ウナルド（=45）、ヤブズラル（=50）、さらに南のデュズテッペ（=17）、サチャクル（=35、クルトルスの南）、デュズテッペの西のヌーリー・パザールバシ（=34）、西の端のホシュギュル（=21）の各地区である。

小工場地域は、都市内部では第1にアレベン川と鉄道駅との中間に位置するチャクマック地区（=10、イノヌ通りの南）、第2に南部のスレイマン地区、ガズハーンの間、それに東部のウナルド地区（=45）である。

第2節 メルシンの発展と都市地区

メルシン（イチェリ州の州都）は、今日、チュクロバ地域のアダナに次ぐ第2の都市である。メルシン港は大きく、ここからキプロスや中東に荷物が運ばれ、今日ではすでに述べたように、町から10数キロ離れた所に自由貿易地区も建設中であり、メルシンは急速に発展している（第II-5図参照）。

メルシンは、歴史的には地中海地域やアナトリア地域の商人が集まる中心であった⁽⁵⁾。メルシンの都市核となった居住地は、以前は村であり部族（トルコマン族）の冬の野営地であった。19世紀の初めには漁村であったが、19世紀前半には湾の近くに位置したことから、チュクロバやタルソス地域への主要な上陸地になった。1850年ころには内外の仲介商人が集まった。

1886年にアダナ・メルシン間に鉄道が建設されると、上陸地としてのメルシンの重要性は増大した。19世紀の終わりにメルシンの町には、500を越える事業所と仕事場があった。20世紀になってチュクロバ地域で栽培された綿花の買い入れのために、外国人商人やその関連業者が住むことになった。第一次世界大戦後の1918年には、3年間の英仏など連合国による占領の後に解放されたが、占領期にシリア国境に近い港町イスケンデルン（人口15万2000人、1985年）が発展したため、解放後もメルシンの発展は一時期緩やかなものとなった。

第二次世界大戦後にアンカラ・メルシン道路、1950年代にはコンヤ・メルシン道路が完成され、トルコ内陸地と東南部地域が結合された。チュクロバ地域において開始された工業化のため、以前には農業と商業の中心地であったメルシンとその周辺は新たに変化を始めた。50年代に建設が開始された大工業や61年に建設の完了したメルシン港が、メルシン重工業化に重要な役割を果たした。精油所、ガラス工場、自動車組立工場も完成し、シテラル地域（地図番号6、調査地区、第Ⅱ-5図参照）から東へ約5キロのデリチャイ川地域は大工業の工場地域となった。その後小工場も建設され、人口は急増した。

1970年代に入ると、中東諸国との結び付きが強まり港湾能力が増強されてメルシンは急速に発展した。70年代にメルシンは、北部、東部、西部へ拡張した。以前からの都市化地域の外に、すなわち共和国大通り（メルシンを取り囲む環状道路の東側）よりも先の北東部や東部に工業地区ができ、北部ではメルシンへ流入した労働者の居住区ができた。例えば、北西部のオスマニエ地区（=16、地図番号は第Ⅱ-5図参照）や、西部に位置し調査地区であり、東南部地域からの流入者の多いデミルタシュ地区（=25）、その北のポルトカル地区（=26）が、北西部における労働者の居住地区である。これに対して東南部では、州庁や市庁舎のあるイエニ・マハッレ地区の東部分（=7）や、東部に位置し調査地区であるシテラル地区（=6）、シテラル地区の北に位置するイエニ・パザール（=4）、シテラル地区と郊外（農村風）地区であるセルジュ

クラル地区の間に位置するギュンドーグ地区 (= 5) などが労働者の居住地区である。北東部のはずれのチャイ地区 (= 2) も労働者の居住地区であり、さらに北西部のはずれのバルバロス地区 (= 30) にも労働者の居住地区が成立した。

メルシンの工業地域は、北東部に位置する調査地区であり準中心地区のシテラル地区 (= 6) の小規模工場の工場地域と、中心商業地域の北と東の地域に走る(ガジ・ムスタファ・)ケマル大通り(共和国大通りの西側部分)の周辺地域にある。小工業地域への投資は1969年に開始され、76年には423の事業所を抱える工業地域が成立した。この工業地域は340ドナム(1ドナム=940平方メートル)の広さを有し、この他に東部には第二の小工業地域(800ドナム)も存在する⁶⁾。

町の中心である伝統的都市地域に続いて郊外地域が拡大し、上層階級は新たな流入場所を求めた。この結果、エフレンク川の西側地域が、西部における流入地域となった。古くから夏の別荘地であった郊外地域に、8~9階の建物ができ始めた。1970年代に都市の中心地域から外へ移動した新しい中間層は、シリフケ通りの北において建設会社や住宅協同組合によって建設された住宅に住み始めた。

メルシンでは、上層階級は共和国大通りの北に位置する西部の共和国地区(32)、その西のバフチュリエブラル地区(31)、この近くのムフト橋周辺(ポズジュ地区)、シリフケ通りの南で海岸に面するイノヌ(=29)、その東のガジ(=28)やピリ・ライース(=27)の各地区に居住する。また、中心地域では、市庁のあるイエニ・マハッレの西のメスディエ地区(=9)や海岸に沿って走る(イスメット)イノヌ大通りの周辺に集まる。

メルシンにおいて1970年から市域内で家賃と土地価格が急騰したため、農業地域から流入した人々は郊外の村に住み始めた。チャイ地区(=2)よりも北東の端に位置するカラバドール地区(=1)、北西の端に位置するチャブスル地区(=34)や、この他にもヤルヤナック、メンテス、チフトリクなどが労働者の居住地区となった。この他に、北東のチャイ地区(=2)、市庁舎

のあるイエニ・マハッレ地区 (=7), 東部の調査地区シテラル地区 (=6), ギュンドーグ地区 (=5, シテラルの北西), オスマニエ地区 (=16, デミルタシュの東), 西部の調査地区デミルタシュ地区 (=25), その北部に位置するポルトカル地区 (=26), 西の端に位置するバルバロス地区 (=30) が, ゲジェコンド地区として成立した。調査地域であるデミルタシュ地区とシテラル地区も, このゲジェコンド地区の一つの例である

第3節 トラブゾンの発展と都市地区

黒海地域における中規模の停滞型商業都市トラブゾンは, 黒海と山岳の間の狭い地域に広がる都市である(第Ⅱ-6図参照)。トラブゾンの町は, 古くはローマの時代にオーガスタ(BC 63 - AD 14) 東方遠征の時の宿場として重要性を増した⁽⁷⁾。その後, 19世紀後半においては, 西欧工業との緊密な結び付きによって東部アナトリア地域との通商で最も重要な港と考えられた。黒海側の東部地域におけるトルコ最大の玄関口であり, イランへの通過道路の起点でもあった。第一次世界大戦後には, シバス・エルズルム鉄道の開通によってトラブゾンと東部地域との交易関係は弱まり, 対岸の黒海諸国との商業関係も弱まったために, トラブゾンは停滞的になった。第二次世界大戦中は黒海が戦場の一つになったため海上交通が制限され, トラブゾンの重要な輸出品であったタバコやヘーゼルナッツは商品価値を失って住民の生活は大きな影響を受けた。第二次世界大戦後には, 海岸線高速道路の開通や新たな造船設備の建設によって活気を取り戻したが, トルコの西部地域におけるほど急速な発展を示していない。また, トラブゾン州では現在でも, ヘーゼルナッツや茶, どうもろこしやジャガイモ, タバコやトマトなどが重要な農産品として栽培されている。

トラブゾンの中心には広場(第Ⅱ-6図参照)が作られ, 市広場の西には市都市計画局など行政機関が集まる。海岸に沿って海岸大通りが走り, 右に折

れる地域にある城公園（カレ・パーク）から東の海岸大通りには港が開けている。さらに東部には大学が位置し、その先にトラブゾン空港がある。

広場から西に進みタバクハーン橋（調査地ザファール地区に入るときに通る地上10メートルの橋）の近くオルタ・ヒサル地区（=20、「中の城」の意、カレと同意、第Ⅱ-6図参照）に位置する。伝統的な商業地区が、市広場から北西に進む通りにあり、海岸に近いところにスーク（屋根付きチャルシ）が形成されている。この中にはベデスティン（商業地域）があり、ベデスティンは、11世紀にはジェノア人の用いた倉庫であった。また、市広場からタバクハーン橋の方にも伝統的な商業地域が広がっている。

オルタ・ヒサル地区の城は、ローマ時代、ビザンチン時代、そしてオスマントルコの時代に建設された三つの部分からなる。最も南に位置する内城は、13世紀にビザンツ帝国の首都イスタンブルが占領されたとき、その将軍がトラブゾンに逃げここに250年間王朝を置いたときに建築されたものである。内城には司令官の丘や倉庫があった。南の地域から北の方へ中城が伸びて次いで下城が広がる。ザーノスの城と呼ばれる地域に見張り塔があった。ザーノスの城は中城の西に位置する砦であり、緊急時の貯水槽を備えた。

中城にはオルタ・ヒサル・モスク（中城のモスクの意）がある。このモスクは、4世紀ローマ時代に建設された教会（古くはイタリアのジェノア商人の建てた神殿）であったが、15世紀、オスマントルコの時代にモスクに変えられた。また、内城の東には新モスク（イエニ・ジュマ、イエニ・ジュマ地区=24に存在）がある。新モスクは古い神殿をローマ人が聖オイゲニス教会に改装し、オスマントルコ時代にモスクに再び改装されたものである⁸⁾。トラブゾンで最も大きく重要なモスクは、オルタ・ヒサル地区をさらに西に進んだギェルバハール・ハトン地区（=13）にあるギェルバハール・モスクである。オルタ・ヒサル地区地域の北東にバザール地域がある（チャルシ地区=4など）。

トラブゾンには、1985年に26の居住区が存在し（居住人口の確認できない地区を合わせれば、40の居住区）、15万6000人（80年には10万8000人）が住み、

3万3500戸の住居がある^⑧。オルタ・ヒサル地区(4200人)があり、その北側にはパザール・カプ(バザール門)地区(=21)、その東にチャルシ(バザール)地区(=4)がある。オルタ・ヒサル地区(=20)からの東には町の古い中心地区である共和国地区(=3)と、新しい中心地区であるガジ・パジャ地区(=12)がある。また、中心地区から海の方へケメルカヤ地区(=18)がある。逆に南の山の方にはボズテッペ地区(=2)などが広がる。調査地区はオルタ・ヒサル地区に近いザファール地区(=26)、東のエセンテッペ地区(=7)であり、郊外地区のバフチェジック地区(=1)はオルタ・ヒサル地区の先に位置する。

第4節 ネブシェヒルの発展と都市地区

1. ネブシェヒルの都市発展

ネブシェヒルは、アンカラの350キロ東に位置する人口5万の小都市である。トルコ中央部に位置する奇岩で有名な観光地ギョレメへの通過地域にあり、また、イスタンブル周辺のマルマラ海地域やエーゲ海地域に比較して緑が少なく黄色と赤茶けた感じの都市である。アンカラ、アクサライからの大通りは町の西に位置する市・バスターミナル広場の近くを通る。市・バスターミナル広場からギョレメの方に向かって約300メートルほど道路(ホクーマテ通り、政府通りの意)を進むと、右手にはネブシェヒル州庁や行政機関、裁判所など政府機関が集まっている(第Ⅱ-7図参照)。ホクーマテ通りのこの部分が準近代的な商業地区がある。ホクーマテ通りから直交して南西に延びる市庁通り(ベレディエ通り)周辺には、バーザールやパッサージュなど商業地域が広がっている。

ネブシェヒルは、砦の近くに集まる古い地域、すなわち、ギョレメの方に延びる道路沿いに広がる町である。町でアクサライからギョレメに延びる道

が一つの軸を形成し、クルシェヒルやハジベクタシの町への道がもう一つの軸を形成する。

ネブシェヒルの歴史をみれば、砦の丘の地区は、オスマントルク期に建設されて当時の名称はムシュカラといわれ、イスラム教徒が10～12家族住んでいた⁽⁹⁾。18世紀の初めにここ出身の大臣が出て発展を始め、1726年には町に格上げされた。スークには1000軒の店や九つのハーンなどが備わり、重要な一つの商業都市となった。

1900年頃、ネブシェヒルには多くのキリスト教徒が住んでいたが、ラテン語は知らなかったという。1908年の「青年トルコ党」革命後もルム人（ギリシャ人）は自らの文化を発展させ、この町は宗教的な中心となった⁽¹⁰⁾。しかし、19年の祖国解放運動の後には、従来の非イスラム教徒が主権を有したネブシェヒルの経済的、人種的構成は大きく変化した。ローザンヌ協定後ネブシェヒルを去ったルム人に代って、バルカンから多数のイスラム教徒が流入した。この変化の中でネブシェヒルは北部の平地の方へ拡大し、歴史的な建物は破壊された。改修されて残っている最も古い建物はルム人の教会であり、今日では監獄として用いられている。

2. ネブシェヒルの経済と地区

1957年当時の建築物の数は3170戸、610の店が存在した。70年までにインフラ投資がなされ、70年代以降は観光地ギョレメなどウルギュップが開発され、ネブシェヒルに活気がもたらされた。80年に至ると、数個の製粉工場の他に、二つの工場が操業を開始した。68年に操業を開始し500人以上を雇用するに至った綿糸工場（国営スメル銀行所有）と79年に増強されたワイン工場の二つである。

ネブシェヒルの重要な産業は、商業と小工業である。1981年には2800軒の商工業者のうち、326軒が自動車や同部品の販売店であり300軒が運送業であった。また、506軒の商店があり、710の小工場に2220人が働いていた。

ネブシェヒルでは、上層階級は町の中心に住み、町の中心から離れるにつれて中間階級、下層階級が居住し始める。町の中心や中心から延びる主要道路付近では5～6階建て、郊外では2～3階建てである。また、低収入地域は古い居住地区であり、とくに、台所やトイレのない住宅が無秩序に密集している砦近くの地域である。

ゲジェコンドの防止と住宅需要への供給のために、アバノス（ギョレメの方向）に近い地域にゲジェコンド抑制地区ができ（2000住宅地区）、建設投資がなされた。都市計画によれば、この地域は1990年に人口が5万人になると予想され、町の西部に労働者の居住地区が計画された。

今日、ネブシェヒルは人口の確認される居住区は28地区である（その他に10地区、現地資料による）。1957年には16居住区であった。調査地区350エブレル地区は7600人を抱える最大の地区である。市の中心部にはカヤ・ジャミ地区（= 11, 居住人口1700人、以下同じ）、ジャミ・アティク地区（= 22, — 680人）、下・共和国地区（= 19, — 740人）、中・共和国地区（= 21, — 670人）などが存在している。

ネブシェヒルの地図によれば、町の中心の市・バスターミナルがある広場近くには、タフタ・ジャミ地区（= 26）、ベクディック地区（= 7）、メミス・ベイ地区（= 30）やカヤ・ジャミ地区（= 11）、ジャミ・アティク地区（= 22）などがある。また、南の方にはトプラクルック地区（= 14）、上・共和国地区（= 27）、中・共和国地区（= 21）があり、エスキジ地区（= 16）もある。北の方にはキラトール地区（= 20）、イブラヒム・パシャ地区（= 12）があり、ハッジ・ルスト地区（= 34）もある。東南部には下・共和国地区（= 19）があり、東にはレイース・ベイ（= 24）やアフエット・エブレル地区（= 18）がある。

第5節 ビュンヤンの発展とその歴史

ビュンヤンは、アンカラの東350キロに位置し（カイセリの南）、人口1万3300人の町である。人口増加率は2～3%と低い町であるけれども、有名なカーペットの生産地で豊かな地域である。「どの家にもカーペット織り台があり、女や娘がカーペートを織っている。ビュンヤンのカーペットは織り糸が細くて光沢のある絹を用いている」⁽¹¹⁾。調査地の郊外地区サルック地区では、妻、娘など3人で大きなカーペット（2メートル平方）を織っていた。

中央広場にはビュンヤン郡庁が置かれ、広場の西には国営カーペット工場（国営スメル銀行所有）がある。また、南の大通りの両側には大きな庭付きの家が並ぶ。木の緑も多い。町の中心から東の方には橋が掛かり、郡庁のある地域よりも農村的な景観が広がる。この地域にある家は、大きくて庭も広く農村の家といった感じであり、隣と接していることはない。町の西にはカイセリからプナルバシを経てガジアンテップに至る大通りが走っている。

ビュンヤンには今日、12の地区がある⁽¹²⁾。

町の中心にはデルビシュガー地区（=6、第Ⅱ-8図参照）、北の方にバイラムル地区、イエニジェ地区（=8）、共和国地区（=7、1940年成立）が広がる。調査地区サルック地区（=5、郊外地区、1960年成立）は、バイラムル地区の北東部に位置する。また、北西の端にイエニ・マハッレ（=11、1968年成立）がある。デルビシュガー地区の西でイエニ・マハッレの南に位置するドーアング地区も1968年に成立した新しい地区である。南の方では南西部にイブラヒム・ベイ地区（=4）、ジャミ・ジャディード地区（=3）、ジャミ・カビール地区（=2、現在、350家族）が位置する。南東部に調査地区スメル地区（中心地区=1、1952年成立、現在500家族、1800～1900人）がある。

〔注〕

- (1) *Yurt Ansiklopedisi* (『トルコ国民百科事典』) (以下、『トルコ国民百科事典』と略), Vol. 5, Anadolu Yayincilik, Istanbul, 1981, p. 3025. (全10巻通しページ数)
- (2) *Gaziantep Kent Biciminin Gelisimi*, (現地行政資料「ガジアンテップ都市景観の発展」), Gaziantep n. a., p. 1.
- (3) 『トルコ国民百科事典』(トルコ語), 第5巻, 3025 ページ。
- (4) Iler Bankasi (州自治銀行), *Gaziantep Kent Butunu* (『ガジアンテップ・マスタープラン』), 1972, pp. 100-101 の表による。また, p. 71 の地図, および現地入手地図。
- (5) 『トルコ国民百科事典』, 第5巻, 3707 ページ。
- (6) 『トルコ国民百科事典』, 第5巻, 3709 ページ。
- (7) Cevat Senturk, *Trabzond*, Istanbul 1975, p. 7.
- (8) Hasan Saltik, *Trabzon*, n. a., Trabzon, pp. 20-21.
- (9) 『トルコ国民百科事典』, 第8巻, 6103 ページ。
- (10) 『トルコ国民百科事典』, 第8巻, 6103 ページ。
- (11) 『トルコ国民百科事典』, 第7巻, 4722 ページ。
- (12) ビュンヤン郡長からの聞き取り。